



**Data**

監督・脚本: カン・ユンソン

出演: マ・ドンソク / ユン・ゲサン  
 / チョ・ジェユン / チェ・グ  
 イファ / チン・ソンギョ / パ  
 ク・ジファン / ホ・ソンテ

## 👁️👁️ みどころ

ヤクザ同士の抗争に警察はどう対処すればいいの? 「警察小説×『仁義なき戦い』」と言われた柚月裕子の原作を役所広司の主演で映画化した『孤狼の血』は大ヒット! 「警察じゃけえ、何をしてもええんじゃ」は今や日本人の誰もが知る名セリフになった。2004年と2007年の「朝鮮族ワンゴン派」や「延辺黒蛇派」の一斉検挙事件を基にした本作は、まさに韓国版のそれだ。

日本のヤクザも韓国のヤクザも残忍だが、朝鮮族のヤクザはそれ以上! 手斧を振り回し、人体を平気で切り刻む非人間的な手口を見ていると、それがよくわかる。韓国ヤクザは組織ごと乗っ取られ、商店主たちの犠牲も日々増大するばかりだ。

さあ、それに対して衿川警察・強力班のマッチョ刑事はいかなる活躍を? 日本なら『孤狼の血』、韓国ならコレ! 今年の刑事モノはこれで決まりだ。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ 刑事モノの傑作! 日本では『孤狼の血』、韓国ではコレ! ■□■

役所広司扮する広島県の呉原東署の刑事の「警察じゃけえ、何をしてもええんじゃ」のセリフは今や知らない人はいないほど有名なフレーズになった。しかし、正当な基準で考えれば、この刑事はハチャメチャだ。「警察小説×『仁義なき戦い』」と評される柚月裕子の原作『孤狼の血』を映画化した「刑事モノ」のヒットは久しぶりで、続編の製作も決定したそうだが、韓国でも「刑事モノ」の傑作として、役所広司とは似ても似つかぬ太っちょでマッチョな強力班の刑事マ・ソクトを主役とした本作が登場!

役所広司は尾谷組VS加古村組の仲介(?)の中にその存在価値を見出していたが、マ・

ドンソク扮するソクトが存在価値を見出しているのは、中国の新興勢力「黒竜組」を撲滅すること。役所広司は1973年に起きた尾谷組と加古村組の広島第三次抗争を再発させないように懸命の「とりなし」工作を続けていたから、彼の役割は極めて複雑だった。しかし、本作に見る中国の新興犯罪組織・黒竜組による毒蛇組の乗っ取りや、ファン社長（チョ・ジェユン）が率いる韓国最大の暴力団との抗争は意外に単純だから、衿川（くむちよん）警察の強力班の副班長であるソクト刑事たちの役割も、黒竜組退治と意外に単純だ。

日本で刑事モノの傑作『弧狼の血』が誕生した今、韓国ではカン・ユンソン監督が苦勞の末に主演をマ・ドンソクとして迎えた本作『犯罪都市』が誕生！

## ■ソウルの加里峰洞での抗争は？■

映画冒頭、韓国ソウルにある加里峰洞（かりぼんどん）の市街地で縄張り争いをしている毒蛇組 vs イス組の抗争が描かれる。しかし、これはいわばコップの中の争い。ソクトはいとも簡単にその抗争を引き起こした犯人を捕らえ、それぞれの組のボスに対してお互いうまくやっていくように仲を取り持ったが、警察の強力班の仕事がこの程度なら楽なものだ。しかし、そこに乗り込んできた黒竜組のボスであるチャン・チェン（ユン・ゲサン）が、毒蛇組の組員が作った借金を理由にボスの毒蛇（ホ・ソンテ）の手足を斧で切り取って殺害する仕打ちを見ていると、韓国の地元のヤクザである毒蛇組やイス組と、中国から乗り込んできた新興犯罪組織である黒竜組の間に残忍性と凶暴性において、これほどの違いがあることにビックリ！黒竜会は、毒蛇組のボスを血祭りにしてその組織を丸ごと乗っ取ってしまったうえ、次には韓国最大の暴力団であるファン社長（チョ・ジェユン）が経営する巨大で豪華なクラブに乗り込んで、やりたい放題の狼藉ぶりを見せるから、これにもビックリ！

こうなると、衿川警察強力班であるソクトのチームが果たすべき役割はもはや地元のヤクザ対策ではなく、中国からやってきた新興ヤクザ勢力、黒竜組の一掃作戦になったことは明らかだ。しかし、韓国の衿川警察強力班の“威光”が中国の新興犯罪組織に果たして通用するの・・・？

## ■本作は実話に基づく物語！その実話とは？■

本作は、「韓国警察×中国の新興勢力×韓国マフィア」の激突をダイナミックに描く面白い“刑事もの”“ヤクザもの”だが、本作は“実話に基づく物語”でもある。そして、その“実話”は2つあるらしい。その1つは、2004年5月3日の「朝鮮族『ワンゴン派』14人を逮捕（京郷新聞）」という見出しで報道された事件。そこでは「韓国在住の中国系同胞はもちろん、一般店舗のオーナーに対して、日常的に暴力行為を続けていた韓国系中国人暴力組織が一斉摘発された」らしい。

もう1つは、2007年4月26日の「防弾チョッキを着て営業、朝鮮族暴力組織『延

辺黒蛇派』を検挙 (NEWS I S)」、「『延辺黒蛇派』、加里峰洞で暗躍 朝鮮族暴力組織32人検挙 (世界日報)」、「『延辺黒蛇派』、朝鮮族暴力組織台頭 (連合ニュース)」、「朝鮮族暴力組織『延辺黒蛇派』を検挙 加里峰洞新チャイナタウンで勢力拡大 (クッキーニュース)」等の見出しで報道された事件だ。この記事だけを見れば、ソクトたち衿川警察の強力班の努力が功を奏したことが明らかだが、そこに至るまでのソクトたちの苦労は？

それをしっかり描いたのが本作だが、そこにみるソクトたちの努力は意外にも正攻法が目立っている。『孤狼の血』では役所広司扮する大上刑事が、正攻法だけでなくウラの手をかなり巧妙に使っていたから、日本人の観客は本作の鑑賞についてはその対比もじっくり確認したい。

## ■□■米朝首脳会談と南北首脳会談、そして延辺朝鮮族自治州■□■

2018年6月12日にシンガポールで開催されると報道された世界初の「米朝首脳会談」は、5月24日夜 (日本時間)、トランプ大統領が突然「中止する」と宣言したことによって不確実な情勢になったが、その後の北朝鮮側の反省 (?) もあって、5月26日には再度の「南北首脳会談」が開かれる等、実現の可能性が模索されている。このように、世界中が固唾を飲んで注目する大きな動きや、去る4月27日に板門店で開催された文在寅大統領と金正恩委員長との「南北首脳会談」の動きの中、チェンたち朝鮮族ヤクザの出身地である中国の吉林省にある延辺朝鮮族自治州では、既に中朝の経済交流が強まるとの予想の下に土地が買い占められ、人々の大移動が起きているらしい。

韓国ソウルの加里峰洞にやってきたチャン・チェンたち黒竜組の本来の活動の拠点は、中朝国境付近の延辺朝鮮族自治州。そこは南西部に白頭山がそびえ、この山から流れ出る豆満江を境にして朝鮮民主主義人民共和国 (北朝鮮) の咸鏡北道と接している。また、東はロシアの沿海地方と、北は黒竜江省牡丹江市と接している。同自治州は、さまざまな場所で漢字とハングルを併記している独特の景観で知られるらしい。チャン・チェンたち黒竜組のヤクザは朝鮮族、すなわち中国の少数民族の1つで、韓国系中国人だ。1992年の中国と大韓民国 (韓国) の国交樹立以降は、この延辺自治州には韓国からの直接投資が急増し、中国の辺境地域としては最も高い経済成長を達成しているようだ。その反面として、韓国の首都ソウルには延辺自治州の朝鮮族が多数移住し、1990年代初頭にはソウルの加里峰洞にはチャイナタウンが築かれていたらしい。

前述のとおり、本作はソウルの加里峰洞で2004年と2007年に起きた衿川警察による朝鮮族のヤクザ組織の一掃作戦を描く実話に基づく物語だが、それを現在、世界の注目の的となっている米朝首脳会談と南北首脳会談、そして延辺自治州の現在の変化ぶりと絡めて考えれば、一層興味深いはずだ。

## ■□■2人の男の夢を本作で実現！その命はリアリティ！■□■

1971年生れのカン・ユンソン監督は、本作が長編映画監督デビュー作となる苦勞人。他方、マ・ドンソクもあのデッカイ体からわかるとおり、高校3年生から移住したアメリカでボディビルダーとフィットネストレーナーをしていた男で、30歳を過ぎてから俳優業に転じた苦勞人。そんな2人が2012年の暮れに「刑事映画を作ってみないか」と意気投合したことがスタートとなって、2人の男の夢が本作で「実話を基にしよう！実際に起きた事件を刑事たちがどう解決したか、映画で徹底的に描こう！」という形で実現した。そんな本作の命はリアリティだ。

パンフレットの「PRODUCTION NOTE」にある登場人物たちの写真を見ると、皆笑いながら撮影していることがわかるが、本作のスクリーン上ではヤクザたちの笑い声は一切ナシ！韓国映画は邦画と違って何かと言葉が大げさだし、男同士の掛け合いは真面目に喋っていてもどこかユーモラスに見えるシーンも多いが、本作でのそれは、ソクトと、上司である班長のチョン・イルマン（チェ・グィファ）との出世をめぐる皮肉っぽい会話ぐらいだ。中国の新興犯罪組織・黒竜組のボスであるチェンや、その下で働く凶暴そのものの幹部・ソンラク（チン・ソンギョ）たち、そして、最後にはギリギリの命拾い状態で、チェンたちへの復讐を果たすファン社長らの演技は、まさにリアルそのものだ。

## ■□■キャストは？受賞は？興行収入は？■□■

カン・ユンソン監督は、本作のキャストについては「どの映画にも見られなかった宝石のような演技力」を求め、「演劇界のソン・ガンホ」「演劇界のチェ・ミンシク」等と呼ばれるほど演劇界では既にその名をとどろかせている俳優たちを集めたい。そのため、本作は「破格のキャスト！主要登場人物全員がニュー・フェイス！」がウリとされ、最高のキャストが一堂に揃ったらしい。そうすると、本作に出演した俳優たちのギャラはそれほど高くないはず・・・？

他方、そんなキャストで作られた本作は、チン・ソンギョが第38回青龍映画祭で助演男優賞を受賞し、編集賞・技術賞・新人監督賞にノミネートされたからすごい。さらに、「青少年閲覧不可映画」で『アジョシ』（10年）（『シネマ27』51頁）を超え、『インサイダーズ／内部者たち』（915万人）（15年）（『シネマ37』66頁）、『友へ チング』（818万人）（01年）に次ぐ680万人を動員する韓国歴代3位の大ヒットとなったから、カン・ユンソン監督やマ・ドンソクはウハウハ！

## ■□■犠牲者は誰？検挙できればそれでいいの？■□■

ヤクザの稼ぎはバクチ、女（売春）、シヤブと言われているが、それらはすべて違法。他方、用心棒の役割を果たすことによるいわゆる「シヨバ代」や、その近代化した形である「企業舎弟」としての稼ぎが違法かどうかは微妙なところだ。日本でも新宿や渋谷等の繁華街で飲食店や風俗営業店を営む場合、安心・安全な営業のため、そのシマを仕切るヤク

ザにショバ代を「みかじめ料」と言う名目で支払うことは現実にある話。銀座でもそれはあるらしい。しかして、本作冒頭に毒蛇組とイス組の抗争事件が起きたソウルの加里峰洞でも、それは同じだ。それでも、そんな「秩序」が保たれていれば問題はなかったのだが、毒蛇組 v s イス組というコップの中の抗争だけではなく、中国の延辺から黒竜組が乗り込み、毒蛇組を組織ごと暴力的に乗っ取ってしまうと、商店主からのショバ代もどんどん高額化していくことに。

ソクトたち警察官は安月給で働く公務員だから高級料亭で飲食することは少なく、いつも行くのは地元の小さな食堂。それでも、ソクトはそれなりの気前良さを見せているし、子供たちにも親切だから、それなりに人気があるらしい。それはソクトの部下である警察官たちも同じだが、いかんせんいくら協力しても、本当に警察がヤクザを退治してくれるとは思っていない商店主たちは、現実には現実として受け入れていた。そのためソクトがいくら黒竜組のチェンたちの情報を集めようとしても、地元商店主たちの協力はゼロ。本作中盤はそんな姿が描かれるが、そこで意外な力を発揮し、商店主たちを一転して警察に協力する方向に持っていったのが15歳の少年の発言だ。これによって、商店主たちは黒竜組の厳しいショバ代の取り立てに苦しみながら隠しカメラで彼らを撮影し、その情報をソクトのもとに届けたから、ソクトたちはそれを集約して、チェンたちを一網打尽にする計画を練り上げていくことに……。

ソクトの協力要請に応じた商店主たちの情報提供によって2004年5月3日の一斉検挙ができたわけだが、それに伴う犠牲はどこに、どのような形で……？ソクトの部下だった1人の若手刑事はチャン・チェンたちとの、ある日の騒動で顔に負傷したことを契機として強力班を離脱し、別の役割を果たすことになったが、ソクトがいつも通っていた食堂の老主人は……？そして、そこで働いていたあの少年は……？しかし、ヤクザの犠牲になるのはいつも地元の商店主たちだ。本作がリアルに描いたように、たしかに加里峰洞の商店主たちを恐怖におとし入れたチェン率いる朝鮮族のヤクザ組織・黒竜組は検挙されたが、それによる犠牲は誰？そして、それをどう考えればいいのか？

2018（平成30）年6月1日記